

方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究

安部清哉

論文要旨

日本語方言の地理的分類には各種の理論がある。研究史上、初めは共時的な解釈が多く行われ、後に通時的な研究が中心になった。その理論の1つである東条操の「方言区画論」は、その後の研究への影響が大きい。今も東条の方言区画論に沿った各種の区画案によって地理的分類がされることが多い。

本稿では、日本語方言の歴史的形成の解釈においては、方言境界線群 (bundle of isogloss) や方言圏 (dialect region) をもっと重視し、通時的視点もより考慮した地理言語学的分類が必要であることを、実例を提示しつつ提唱する。それに先だて、方言分類理論の課題を明確にするために、東条の提唱した方言区画論の受容と諸家による区画案を検証し、ついで、歴史的に重要な方言境界線・方言圏とを改めて提示して検討する。

東条の区画論は、通時的視点をも含む理論と見なせる。しかし、その受容では共時・通時で立場が別れることになり、そのことが後の研究者の区画案の相違にも影響した。共時的分類の代表的な解釈は、東日本、西日本、琉球方言の3地域に区分する案であり、もう1つは、さらに西日本を、九州とそれ以外にわけるとなる4区分案である。

一方、地理言語学的研究の進展によって、方言区画論の区画分類とは異なる方言境界線が解明されるようになった。さらに、区画や境界線とも異なる「方言圏」の点でも、地理的分類を再検討する必要があると認められる。

日本語方言は、方言区画、方言境界線、方言圏のそれぞれの共通点や異なる観点、矛盾点を止揚して総合的に解釈していく必要がある。区画論・分類理論を比較検討すると、日本語の方言形成は、より複雑な過程を経ていると解釈できる。

その方言境界線、方言圏を通時的観点から検討すると、日本語方言はアジア・太平洋の言語との直接的関係も視野に入れて考察する必要があることがわかる。

キーワード【方言区画論、方言境界線、方言圏、南北方言境界線、東条操】

1. 方言の分類理論と日本語方言の区画研究

「方言の区分」という研究は、広義には方言の分類論に含まれる。それゆえ、どの言語にも当てはまるテーマである。

一言語内の方言の分類には、言語学的には2つの分類がある。「方言類型論」による分類と、通時的観点からの系統論的分類とである。

日本における方言の分類については、日本の方言学が、近代(およそ1900年以降)に独自の発展を経てきたため、この「方言類型論」的観点と通時的分類とが混在して展開している。

初期の日本での研究では、東条操氏の提唱した「方言区画論」の影響が大きかったことが関係している。東条のその論（「方言区画論」）における共時的観点（類型的研究が含まれる）と通時的観点とが、区別されずに理解されてしまったことが、要因の1つである。

東条の論以外に、方言の地理学的区分としては、西洋（欧米）の研究の受容も盛んに行われた。「等語線」による方言区分や、「方言圏」という概念による分類なども、試みられている。

本稿では、まず、日本の方言学への影響が大きかった東条操の「方言区画論」が示していた通時論的立場を確認する。また、東条の通時的共時的解釈とは別に、「方言区画論」のそれぞれの研究者の理解に基づく種々の「方言区画案」の諸研究を区画図も示しながら、その相違点をあらためて比較する。また東条の「方言区画論」の検討に先立って、東条の考え方の背景になっている、日本語の方言区分に関する過去の記録を確認する。近代以前における方言の区分に関する文献での記述が、東条の区画案やその後の諸区画研究に（部分的にはあれ）投影しており、特に彼の区画案立案における通時的考え方に影響しているからである。

2. 日本における東条操の「方言区画論」とその影響

日本の近代的言語研究は、明治時代（1968年）以降、西欧の言語学を取り入れて新たに発展した。一方、方言研究は、統一的「標準語」を制定するための基礎資料として、諸方言の地理的相違を調査し、それらの歴史的関係を研究するところから始まった。そのため、西欧の言語学の影響を強く受けるようになる前に、独自に発展してきたという面が強い。

東条操の「方言区画論」は、諸方言の具体的特徴と地理的範囲を把握すること、および、それら諸方言相互の類似性（または、通時的関連性）を体系的に（樹形図化して記載して）把握することを目的として、提唱された。「方言区画論」は、日本人自らが最初に提唱した方言理論であった。それ以降の方言研究は、しばらくの間、東条の「区画論」の完成を目的として発展することとなった。第4章以下では、そのような「方言区画論」と「方言区画」の諸説を比較していくことにする。

3. 方言を区画する意識（東条区画論以前）

東条操によって「区画論」が提唱される以前に、1300年前から、日本人は、日本語の相違を地理的に区画してとらえていた。東条の「区画論」の理論にもそれらが影響している。この3節では、それら歴史的「方言区画意識」の代表的な事例を紹介する。これらの記録のいくつかは、東条の区画論に影響している。

3.1 奈良時代

『万葉集』（8世紀の歌謡集）では、巻14「東歌」に、東日本方言（東国語）が記録されている。巻14の歌謡は、今日の東日本（長野・静岡より東）のみに限定されている。そこには、東西の

2つの方言を確認できる。『万葉集』でのこの東西境界の位置は、『日本大文典』《1604－8年刊行》の記録、および、明治時代の方言調査の東西境界線と同じ位置にあたる(図1参照)。この境界線は、日本語の方言境界線として、記録上最も古い。この境界線は、地名を付けて「糸魚川・浜名湖(東西)方言境界線」と呼ばれている。

区画案において、この境界線を第一義的に(=もつとも)重視する考えの他、2次の区画とする解釈とがある。記録が最も古いにも関わらず重視的境界線としないのは、これよりも西側に音声・アクセント上の相違があること、『万葉集』の記録が行政的区別である可能性があるためである。

3.2 平安時代

『東大寺諷誦文稿』(9世紀初め)には、「東国方言」「飛驒(飛驒)方言」「毛人方言」いう3方言が記録されている。この3地域と、その他にあたる西日本方言の4区域の区別が認められる。「飛驒方言」は現在の長野方言、「東国方言」は東日本方言である。「毛人方言」は、アイヌ語を指すか、東日本内でもより方言的特徴が強い地域(北関東以北)を指す説などがある。いずれにせよ、上記3地域を含む東日本方言と、西日本方言とを区別する意識は、平安時代以降(794年以降)にも認められる。

3.3 室町時代(中世後半)

15世紀頃に「京へ筑紫に坂東さ」という諺がある。これは、移動方向を表す助詞「へ」「に」「さ」とその使用地域を表している。「に」は九州地方(筑紫)、「に」は九州以外の西日本(京都)、「さ」は東日本(坂東)でよく使われたことを示す。東日本、九州、その他の西日本という3区画が意識されている。

『日葡辞書』(1604年刊)は九州方言を「下」と記載して区別している。

この2つの資料からは、中世後半には九州方言が特徴的なものとして意識されて来たことがわかる。これは、当時キリスト教を布教にきたポルトガル・スペインなどの宣教師達が滞在したのが北九州であったために、九州方言への意識が強く働いたことも関係している。

『日本大文典』(1604－8年刊)には、多くの方言の記述がある。東日本(「坂東」)の項では、静岡(三河)以東の東日本側が1つの区域として記述されている。

3.4 江戸時代

『物類呼称』(1775年)でも山城・近江また美濃・尾張を境に東西日本の二方言に分ける。また、この時代に全国各地で刊行された多くの方言集では訳語として当時の標準語が記載されていて、その訳語に時代的な変化がある。18世紀半以前は、西日本の都の言葉で訳されているが、それ以降は、東日本の中心地である江戸語で訳されている。18世紀後半以降、江戸の方言が(後に東京の言葉として受け継がれる)が全国的に普及したことを示す。

4. 東条操の方言区画論

4.1 東条の区画論が現れる背景

方言区画に関する最初の研究としては、音韻から「裏日本・東日本・西日本」の3区分を示した大島正健(1895)の研究がある。

次いで、文部省・国語調査委員会『口語法調査報告書』(1906)の文法の調査によって、越中・飛騨美濃・三河(現在の「富山・岐阜・愛知」)の東境に沿って東西に二分される境界線が示された。この境界が、『万葉集』の境界と一致することがわかり、東条とその後の区画研究へ展開する契機となった。

4.2 東条操の「方言区画論」とその特徴

4.2.1 東条の定義と問題

「方言区画論」は、東条が『国語の方言区画』(1927)において方言学の一分野として提唱した。東条は幾度か修正をしているが大綱は変わらない。方言区画について、東条は、少し後の記述であるが、次のように定義している。

「国語が幾つかの方言に分けられると考えた場合、その区画が方言区画である。この方言区画は個々の俚言現象の分布とは全く別個のものである。(略)方言区画は音韻・文法・語彙の全体の考慮の上で設定されなければならない。」(『国語学大辞典』1955、p.857)

これは簡潔な記述であるが、東条の著作を見ても、「区画」の定義、「区画」の基準は明確に述べられていない。東条が論を発表した当時、各地の方言調査が始まったばかりで方言情報は不十分であった。区画の基準とする方言特徴を、全国的規模で具体的に示せる段階でなかったため、やむを得ない面がある。しかし、理論的な曖昧さが残ったため、その後の研究者の区画案も、どのような基準を優先して個々の区画が行われたか、その具体的基準が明示されないことが多かった。

東条理論のもう1つの問題点は、目的が通時的研究なのか共時的研究かについて、研究者での解釈が分かれた点であった。

さらに、東条の区画論では、住民の方言意識も考慮するのが特徴であったが、それにも賛否があった。

東条の定義や考えを、後の研究者が各自の解釈で受容していった。そのため、区画の基準、目的、通時的か共時的な解釈かなどの点で、区画の仕方が個々に異なることになった。最後は、かなり考え方の異なる諸案が併存することとなったのも、やむを得ない面があった。

4. 2. 2 東条の区画論での記述

東条自身は次のように記述している。そこからは、東条は、歴史的視点も重視し、通時的解釈を組み入れていたことがわかる。

同じ東条の論に対しても意見が異なるので、以下においては、共時・通時に関わる部分を中心に、東条の記述を紹介しておくだけに留める。(下線は引用者)。

- 「国語がいくつかの方言に分れたのは何時頃の事であるか、その時代は分らぬが随分古い事であろう。太古、東北地方に～」
- 「時代による国語の変遷を、土地の上にそのまま移してゐるのが本州の方言と、九州の方言である。」
- 「方言の研究は(略)方言間の差異がどういう点にあるか、かかる分裂がどうして起こつたかということを明らかにするのをその目的とする。」
- 「方言を比較して、その体系の差異を調べ、その相互関係をただし、その分裂の順序を推論し、国語の全貌を地理的区画によつて明示し得るようにならなければならない。これが方言区画論である。」
- 「方言区画を支配する要因としては(略)一つは地理的なもの(略)他の一つは社会的なもの(略)その外に人種的因子も方言発生の原因として考えられることがある。」

上記の記述からわかるように、東条は、方言の区画図と区分表というのは、歴史的解釈に基づき通時的な一言語の「分化過程」を示すものと考えていた。

金田一春彦は、区画論は通時的なものであるとしてそれを自身の区画案で具体的に示した。一方、服部四郎は、通時的な区画理論を強く批判し、加藤正信は共時的解釈を提唱しているという立場を取った。受容した研究者によって意見の相違が大きかった。

4. 3 東条区画論の進展——第1次・第2次・第3次案——

ここでは、東条操の方言区画の案の変化を、地図と一覧表とで示す(第2次案は略す)。

4. 3. 1 東条の第1次案——『大日本方言地図』『国語の方言区画』(1927年)

東条の最初の区画案は、『大日本方言地図』に示され、区画一覧表は『国語の方言区画』に掲載された。区画には、方言の相違だけでなく、行政区画や地形的区分、日本語史上の解釈などが、総合的に考慮されている(◆図1、▲表1)。

4. 3. 2 東条の第2次案・第3次案——『日本文学大辞典』1934年・『日本の方言学』1953年

東条は、区画案の一部を修正した(『日本文学大辞典』、第2次案)。さらに、1953年に『日本の方言学』で再修正した方言区画案と一覧表を提示した(第3次案、◆図2、▲表2)。

第1次案と第3次案との大きな相違は以下の点である。

- ①東西方言境界線削除、
- ②本州中部方言を改編し、その中の北陸方言は西部方言に編入、
- ③四国方言の改編、
- ④八丈島方言の独立、

特に、①の境界線の位置付けは、研究者によって大きく異なる。

5. 方言区画案諸説

東条以後に発表された主要な方言区画案を、以下に、方言地図および／ないし区画系統表で示しておく。

5.1 都竹通年雄の区画案 1949年

都竹通年雄(1949)は、東条操第3次案の4年前に、区画系統表(▲表3)を発表した。◆図3は、それを元に、加藤正信(1977)が作成したものである。その特徴は、次の点である。

- ①区画の根拠となる音韻上、文法上の言語現象を明示した、
- ②地域の面積や人口にとらわれず言語自体の相違を優先させた、
- ③行政的単位にとらわれなかった。

都竹案には、新たな区画線や、狭い地域を独立させる区画(例、八丈島)が新たに見られる。これらは後の研究に影響した。具体的には、次のような特徴がある。

- 北奥羽方言と南奥羽方言の区別——後の主要な解釈にも踏襲された
- 北関東を南奥羽方言に含める——現在でも有力な区画案の一つ
- 狭い地域の独立(八丈島方言の独立・十津川・熊野の独立)——以後の区分に影響

5.2 金田一春彦(第二次)の区画案 1964年

アクセントの分布を特に重視した区画案である(◆図5)。その4つの区域は、同心円的な周圏論的配置になっている。通時的観点による解釈が特徴である。(参考まで、金田一の第一次区画案(1955)を、◆図4、▲表4にあげておく。)

5.3 平山輝男の方言区画案 1968年

ここに示す平山輝男の区画案は新しい1968年の方案である(◆図6、▲表6)。本土方言を4区画、琉球方言を2区画にしている点が特徴である。

5.4 藤原与一の方言分派地理学における「古系脈」(1964年)

藤原与一は、東条とは異なる独自の方言理論を論じた。彼は通時的解釈によって、古い方

言的特徴を残す地域(斜線部)を図示し、「古系脈」と名付けた。この地域が選択された具体的基準はわかりにくい部分がある。安部(2008)では、◆図7のように、南北および東西で方言が変化する4本の方言境界線によって区切られた外側の部分に古い日本語が多く残っているという解釈を示し、それが藤原のこの古系脈地域とよく一致しているとした。(ABAのAが古く、また、南北にも南北各々の古い特徴が残る。)

5.5 奥村三雄の「方言区画の作業原則」

区画案の研究において、基準や作成手順を議論することはほとんどなかった。自分の区画案の判断基準を示した研究でも、音韻、文法等の幾つかの現象を簡単に記す程度であった。奥村三雄(1958)は、客観的な基準や一定の規則が明確にされないことを問題とした。そして、「量の原則」「質の原則」という基準から具体的な作業規則を公表し、それを基準とすることを提唱した。しかし、その案が十分検討されることは少なかった。

6. 各言語分野毎の方言区画案

本章では、言語特徴別に検討された区画案の主要なものを具体的に紹介する。各案の基準が異なるので、地理的区画の多くの考えを具体的に示して、地図で比較できる方が研究上有効と考えられるからである。

さて、方言は、音韻、アクセント、文法、語彙などのジャンルによって地理的現れ方が異なる。それゆえ、各ジャンル毎に方言区画を考えことには、一定の理論的意義があるがある。方言特徴全体から区画案が提出される一方で、各分野毎に区画图が発表された。

ここに提示するジャンル別の区画案を「総合」して1つの区画を確定しようとするなら、どのジャンルでの判断をどの程度に優先的に考えるかが問題となる。また、各図で異なる区画の部分はどう処理するかも問題となる。客観的優先順位は見出しにくい。一方、ジャンル別の区画图を、上掲の総合的「方言区画案」と比較してみたい。そこに共通する境界線を見出せるのはたいへん興味深い。

6.1 音韻による方言区画 (金田一春彦 1953)

◆図8は、音韻の特徴からみた方言分布図である(金田一春彦 1953)。

6.2 アクセントによる方言区画 (平山輝男 1968)

◆図9は、アクセントの分類を重視した分布図である(平山輝男 1968)。

6.3 文法による方言区画 (井上史雄 1986)

次の◆図10は、文法による分類図である(井上史雄 1986)。

6. 4 語彙による方言区画

6. 4. 1 語彙による方言区画 (橋正一 1936)

◆図11は、語彙による分類図の1つである(橋正一 1936)。

6. 4. 2 語彙による方言区画 (五條啓三 1985)

◆図12は、語彙による分類図のもう1つの案である(五條啓三 1985)。

6. 5 敬語による方言区画 (加藤正信 1973)

◆図13は、敬語からみた方言分類である(加藤正信 1973)。

6. 6 東条区画論以降の区画研究——計量的方法・方言境界線による研究

これら以外にも、柴田武・熊谷康雄(1985)、熊谷康雄(2002)のネットワーク法、井上史雄(1986)(2001)(2002)による地点毎の指定語形回答数による作図など、計量的方法が提示された。一方、等語線による方言圏の手法の安部の一連の研究(安部2013.3,安部2014.3ほか参照)からは、主要境界線が歴史的経緯で形成されていることも明らかになった。

7. 区画案の変遷——概観

主要区画案を比較し各特徴を概観する。

地理的分割パターンから見ると、東条の「本州方言3分説」は、都竹通年雄(1964)、金田一春彦(1955)に引き継がれた。本州を東西に2分する「本州2分説」には、奥村三雄(1950)、藤原与一(1962)などがある。また、南島方言については、藤原は奄美・沖縄・宮古・八重山に四分割した。平山輝男(1960)は、通時的観点を重視し、新たに八丈方言を加えて本州を4区分した。金田一春彦(1964)では、アクセント体系を基準に独自の集圏的地理区分により、「内輪・中輪・外輪・南島の」同心円的4分説を提示した。柴田武(1977)は、全て「本」と「分」とに2分割を繰り返す2分割下位区分方式を行い、「本州(本) + 沖縄(分)」以下を樹形図のように階層化した。

方法論的な点から見ると、都竹通年雄は、行政区画に制約されない案を早く提示した。言語ジャンルによる区画案も発展した。語彙を中心に区画する橋正一案、アクセントを中心に区画する金田一春彦案、敬語によって区画する加藤正信案がある。

奥村三雄は、区画基準が必ずしも明示されないことを問題視した。そして、「量の法則」と「質の法則」という具体的作業手順を初めて明示し、より客観的基準による区分を提唱した。それは十分な議論には発展しなかったが、計量的区分法に受け継がれた。

通時的解釈として、「方言周圏論」の影響を受けた金田一春彦の案は、南北の遠隔地が同じ区画地に属する「逆周圏論的」分布(CBABC分布)であった。それに対しては、離れた地域(例

例えば、C-C)を「同一方言」とするのは不適切という批判があった。藤原与一はより史的観点を重視した方言系統案(「分派」と呼ぶ)を展開した。

提示した諸区画図のように、研究者によって区画案は大きく異なった。その理由は、研究者によって、どの言語現象を取り上げるか、その中でもどの現象により重点を置くか、等の判断が異なったためである。この問題は、たとえ基準の根拠を明示したとしても、言語理論が多様であるのと同様に、区画基準の統一(一元化)ということは不可能とも言える。むしろ、「個々の等語線を重ね合わせた方が(略)根拠がわかって説得的な面がある」(加藤)という指摘は正鵠を射ている。その後は、地理言語学的研究が発展していき、方言区画を通時的観点から考える研究へ関心が移り、方言境界線の重なりとその歴史的解釈が重視されるようになった。

8. 等語線による方言区画

8.1 等語線による地理言語学的研究

欧米の地理言語学における方言分類では、古くから等語線の重なりによる区画研究がある。日本でも第二次大戦以後、方言区画論と併行して、等語線による地理的区分の研究が行われてきた。その結果、

- ①日本語には重要な等語線の重なりがいくつかあること、
- ②各等語線毎に異なる地理的地勢的背景があること、
- ③各等語線の成立要因には歴史的な理由と順番があること、
- ④各等語線は方言区画案の主要な境界線と一致していること、
- ⑤④の点から見て方言区画上の重要な境界でもあること、

などが明らかとなってきた。以下では、これらの重複等語線群を、1語毎の等語線と区別し「束状等語線帯」(ないし等語線帯)と呼び、それについて概説する。

8.2 東西方言境界線

日本には「糸魚川・浜名湖方言境界線」(「東西方言境界線」とも)と呼ばれる、東西方言を2分する等語線帯がある(◆等語線帯Ⅰとする。◆図Ⅰ参照)。本州中央にある大きな山脈と浜名湖による自然の地形が、方言境界の要因である。奈良時代には既に存在が確認できる。ただし、この境界線での方言の相違は、他の境界線よりも多くない。東西の方言の新旧も、種々雑多で一定でない。

8.3 「外輪」対「内輪+中輪」方言境界線(「ABA」型区分)

もう一つの等語線帯は◆等語線帯Ⅱの境界線である(◆図Ⅱ参照)。日本語を、中央部(中部、近畿、四国、中国、九州東北部)と、その外側である周辺部(北関東以北と、沖縄を含む九

州西南部以南)とで、ABA型をなす。周辺部にAが、中央部にBが分布する型であり、AとBの境界線が東西の2箇所を区切っている。この線の位置は、金田一区画案における「外輪方言」と「中輪+内輪」方言との境界線と一致する。Aの言語現象が古く、Bが新しいという特徴を持つ。等語線帯が作られた要因は、東側では、利根川という大型河川と、古代における大きな「古代奥東京湾」(沿岸部入江状の斜線部)の存在と北側の山脈(内陸部のグレー部分)である。

興味深い点は、この等語線帯の位置で既に6000年前に共同体の分布が相違したことが考古学遺跡から確認できる点である。◆図アは、約6000年前の縄文時代中期の関東平野の考古学遺跡の南北差、および、「古代奥東京湾」(斜線部分)の広さを示す。○記号と●記号は考古学の異なる遺跡を示す。「古代奥東京湾」と河川と山脈(グレー部分)を境界として、遺跡分布が南北で相違する。遺跡の分布の相違は共同体の相違を示し、共同体の相違はその間での言葉の相違を示唆する。この遺跡の境界と関東側のABA等語線帯はほぼ一致する。◆図IIの関東の等語線帯は、古代の共同体での異なる方言の名残かその影響が間接的に後代まで残った蓋然性が高い。また、B地域における言語現象は、弥生時代以降と解釈できる現象が少なくない。結論として、総合的に解釈すると、全体としてAに縄文時代以降の古い特徴が強く残存し、Bに弥生以降のより新しい現象が拡大した蓋然性が高い。

(◆図IIの関東におけるABの境界線としては、この他に、地質構造線(図イ)、地形名の分布でも、古い特徴が残るとされる水源地形名である「河川名」「湖沼名」での境界線(図ウ、図エ)などがあり、いずれからもこの位置で方言などの文化的境界線が古くから存在し得ていたことを裏付けている。)

8.4 南北方言を区分する等語線帯(南北方言境界線)

3つ目の等語線帯は、◆等語線帯III(◆図III参照)のように東西に横に延び、方言を南北に2分する。このような南北をわける方言境界線の存在を最初に指摘したのは柴田武である。ここでは「南北方言境界線」と呼ぶ。◆図IIIでは仮に5本の境界線で代表させているが、該当する現象は、語彙・音声・アクセント・文法全てにたり、現在30程の現象が該当する(詳しくは安部2013.03 & 2014.03参照)。この等語線帯は次の重要な特徴を持つ。

- (1) 東アジアの等語線帯と緯度的位置において連続する(◆等語線帯 図III A参照 アジアの等語線帯)、
- (2) 印欧語族におけるCentum-Satemの等語線帯と成立条件が一致する(◆等語線帯 図III B参照 ヨーロッパの等語線帯)、
- (3) 気候条件の南北の顕著な相違が要因となって、人的移動への制約(定住地域の固定)、動植物の南北相違、食料とその加工法の南北相違、民俗学的伝統の南北相違ほか、文化的諸現象の南北差が極めて明瞭で顕著である(これらの点は安部2006.03)。

(4) (3) の点から見て、日本語方言の等語線帯として最も古いと解釈できる、

(1) (◆図ⅢA) と (2) (◆図ⅢB) の等語線帯も合わせて考察すると、(3) (4) の理由と、日本語の南北方言境界線の成立要因が理解できる。

即ち、◆図ⅢA は、この等語線帯とほぼ同じ緯度にある中国語の等語線帯と、自然現象、文化現象の境界線である(朝鮮半島の朝鮮語でも同様であるが説明を略す)。日本語方言と中国語方言どちらでも、方言の境界線と気候条件の相違、文化現象の南北境界線が、東西横に接続している1本の連続線上にあることがわかる。また、◆図ⅢB では、欧州言語の Centum-Satem の境界、言語音声の等語線帯、気候条件の境界、動物分布の境界線が近接していることがわかる(細かな説明は安部2013.03)。これら3つの方言等語線帯(日本語、中国語、Centum-Satem、かつ朝鮮語)は、気候条件の相違という共通点がある。それゆえ、これらの等語線帯の最も重要な成立要因は、一つには年間平均気温の顕著な南北相違、および、いま一つにはそれに伴う年間降水量の大きな南北相違、と結論付けられる。それが、直接的には(3)の特徴を生み、それに伴う人的移動の固定が、間接的に南北方言の相違を長期にわたって形成し維持してきたと解釈される。

8.5 「内輪方言」圏の形成——「巡礼」による均質化——

上記3つの束状等語線帯とは別に、興味深い等語線がある。それは、ほぼ京阪式アクセント地域を囲む等語線であるので、「方言圏」という研究観点から考察するのが適切である。この方言圏に対しては、2つのとらえ方ができる。

1つは従来から広義の「tone アクセント」地域と解釈されている地域(◆図14、◆方言圏 α とする)である。もう1つは通常の「京阪式アクセント」とされている範囲であり、畿内地方と四国の大部分と北陸の一部が該当する(◆図9の格子模様部分、◆方言圏 β とする)。方言圏 α は方言圏 β の領域に九州南部と沖縄方言が加わった範囲であることがわかる。この方言圏 β には、母音連続が融合しないという特徴もある(◆図17)。

この2地域に共通した未解決の課題は、ア：海を隔てた2地域(畿内と四国)、及び、イ：海を隔てた4地域(畿内、四国、九州南部、沖縄)で、なぜアクセントの共通性が形成され今日まで維持されたか、という点である。(これまでの方言研究史で、これら「海を隔てた特異な地域での共通性」(特にア)の問題がなぜ1度も問われてこなかったのか、ということは、方言研究者は知っていなければならない。)この課題には、次の現象が各々解明のヒントを与えてくれるであろう。

方言圏 α には「ヨム(数える)」という奈良時代以前からの古語が分布する(◆図15)。このヨムの語源と歴史がヒントとなるであろう。この地域は少なくとも単語ヨムの歴史と同程度以上に古いと推定される。このヨム(意味は「読・詠・算・節」の漢字の意味が該当する)に

は、数の計算の他に、文字の読解、和歌の読詠という文化的意味が含まれるので、奈良時代以前で、比較的新しい一定の文化的段階以降に形成された分布と推定できる。ヨムの語源は中国語「読」と同源であろうと解釈され(d-j 交替語形)、中国大陸南方沿海部の方言音であった可能性が考えられる(オーストロネシア語族か中国語かは未詳)。

奈良時代以前以後において、方言圏 α 内の畿内側から沖縄へ、言語・文化が伝播した事実は確認しにくい。反対に、沖縄側から本土への言語の伝播は、過去3万年の歴史上、1度だけ生じ得た事実を指摘できる。台湾とその対岸の中国南東部を原郷(Urheimat)としていた Austronesian(南島)語族(以下、AN)は、約6～5000年前に太平洋に拡散を開始したとされ、一部は黒潮に乗って琉球列島(以北)に及んだ。このAN語族の太平洋拡散という事実(定説)は、日本語の成立にAN語族の影響があるという定説と符合してくる。AN語族のこの拡散説は、たとえ間接影響だとしても方言圏 α の成立理由の有力な仮説である。

方言圏 α よりも狭い方言圏 β は、より新しい時代と見られる。そして、方言圏 β のように、畿内と四国だけが共通文化圏を形成している現象は、考古学や歴史学、民俗学、民族学、文化人類学を広く調査しても、次の一現象しか確認できない。それは「四国八十八箇所巡り」及び「西国三十三箇所巡り」という、畿内とも関わる宗教的「巡礼」が繰り返し行われた領域であるという共通点である。

方言圏 β と2つの巡礼の範囲とは、多少のずれはあるものの、極めてよく一致している。この巡礼は奈良・京都時代以降に徐々に浸透し増加したとされる(頼富・白木(2001))。この地域を巡礼する人々、特に都の僧侶・支配階層・貴族などは、文化的に影響をもつ都(畿内にある奈良・京都)の文化と言葉を(特に発音やアクセント)共に伝え、当該地域では、都の高度な文化としてそれらの影響を肯定的に受容したであろうと推定される。それが、海を隔てたこれらの地域の言語的「均質化」を徐々に形成する要因の1つになった、と考えることができる。この巡礼は今も行われており、現在でも当該地域の方言の共通性を維持させている一要因でもある。成立要因としては結論を慎重に保留したとしても、少なくとも、この方言圏 β の均質化を維持してきた一要因であろう。現在、この畿内・四国の地域に共通した、他地域と異なる文化現象というものは、この「巡礼」しか見出されないのである。

9. 日本の方言分類論の課題

9.1 方言区画論の問題点

本稿では、日本語方言の地理的分類の研究を、東条操「方言区画論」の研究史を中心にふりかえってみた。また、日本語方言における重要な3つの方言等語線帯とその成立要因を比較した。そのうちの一本「南北方言境界線」は、アジアの方言等語線と連続していた。インド・ヨーロッパ語族(I.E.)のCentum-Satemの等語線帯とも比較する必要があることも指摘した。

日本の3本の等語線帯は、日本語方言の成立においてどれも極めて重要な等語線帯と考えられる。しかし、従来の「方言区画案」の図では、特に等語線帯Ⅱ、Ⅲについては、十分に考慮されていないことが明らかとなった。従来の「方言区画案」は、「共時的解釈」が主であり（金田一案と、藤原与一の解釈を除く）、通時的視点が重要視されてこなかったため、と考えられる。

9.2 今後の地理的分類研究の課題

今後の日本語方言の地理言語学的研究においては、次のことが研究課題となろう。

- 1 本稿6章で紹介した3つの等語線帯の歴史的解釈
- 2 それらの等語線帯をもつ個々の方言現象1つ1つの歴史的解釈
- 3 「南北方言境界線」と、アジア言語（中国語・朝鮮語）の等語線帯ⅢA（◆図ⅢAでは朝鮮語にも南北等語線帯がある）、および、I.E.のCentum-Satemの境界線との比較研究（例えば、南北間には、共通した音韻対応が認められる。安部2013.03参照）
- 4 その他にも存在が確認できる等語線帯の歴史的研究（例えば、「内輪方言」の境界線、九州のアクセントの境界線、北緯40度付近での等語線帯など）
- 5 方言圏 α の成立要因
- 6 理論としての「方言区画論」の、通時的研究としての再検討

（以下、次頁より図・表、参考文献あり）

◆図1 東条操 第1次 方言区画図

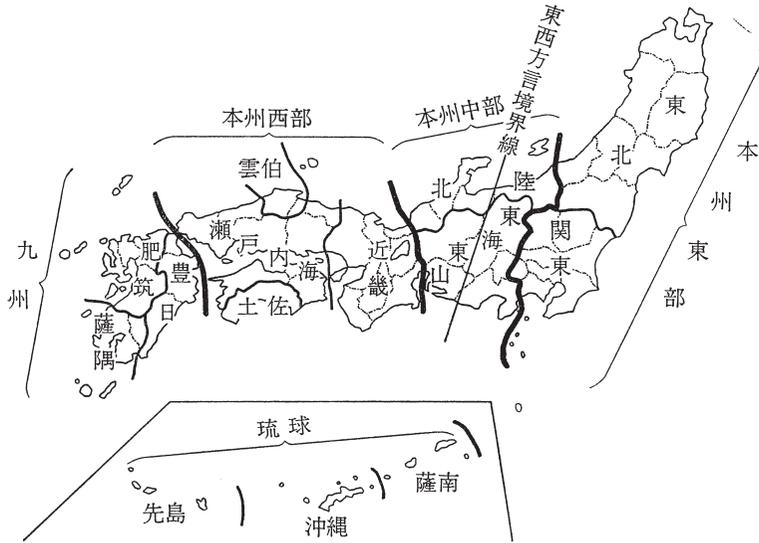


図 東条操の区画(第1次) 昭和2年『大日本方言地図』による

▲表1 東条操 第1次 区画系統表

日本語											
琉球方言				内地方言							
………				九州方言			本州方言				
………				………			本州西部方言		本州中部方言		本州東部方言
………				先島方言	沖繩方言	薩南方言	薩隅方言	肥筑方言	豊日方言	土佐方言	雲伯方言
………				………	………	………	瀬戸内海方言	近畿方言	北陸方言	東海東山方言	関東方言
………				………	………	………	………	………	………	………	東北方言

◆図2 東条操 第3次 方言区画図

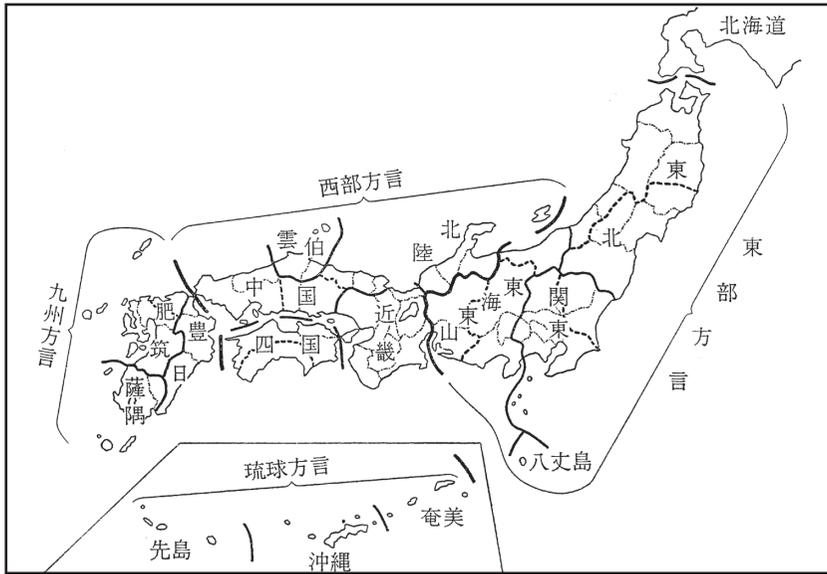
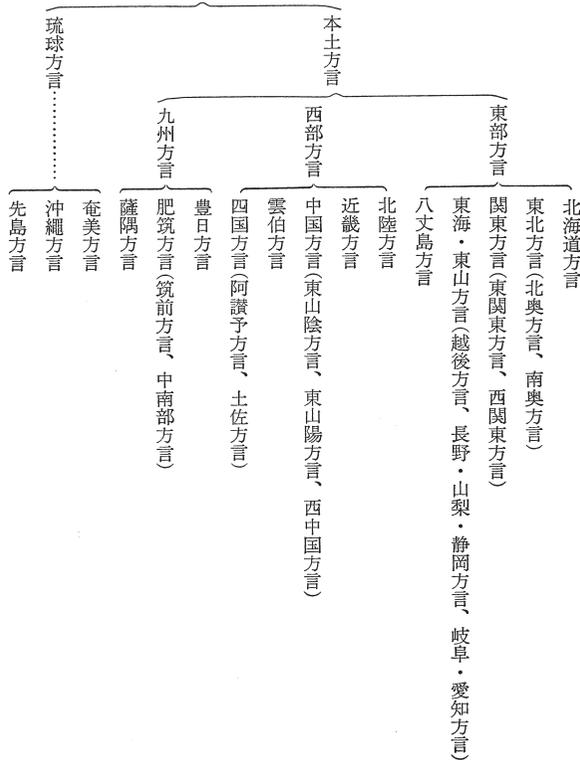
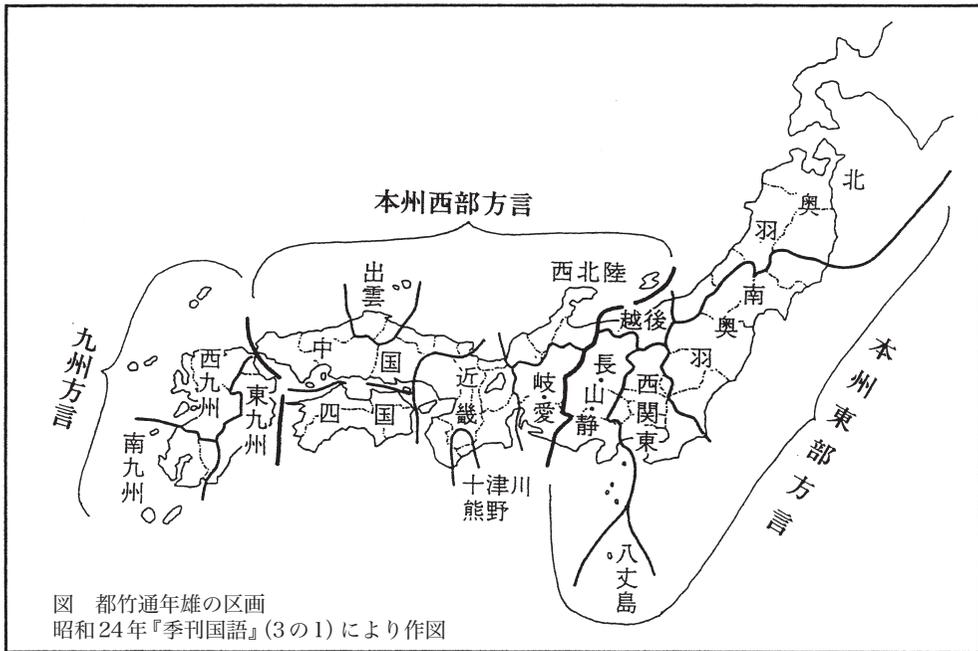


図 東条操の区画(第三次) 昭和28年『日本方言学』による

▲表2 東条操 第3次 区画系統表



◆図3 都竹通年雄の方言区画案 (1949)



▲表3 都竹通年雄の区画系統表

琉球 (これから先の小分けは省く)	現代日本語		
	九州	本土	本州東部
	南九州方言	本州西部	越後方言
	西九州方言	中国地方方言	八丈島方言
	東九州方言	十津川・熊野方言	西関東方言
	四国方言	近畿方言	南奥羽方言
	出雲式方言	西北陸方言	北奥羽方言
		岐阜県・愛知県方言	
		岡県方言	
		長野県・山梨県・静岡県方言	

◆図4 金田一春彦の方言区画案 第1次案(1955)

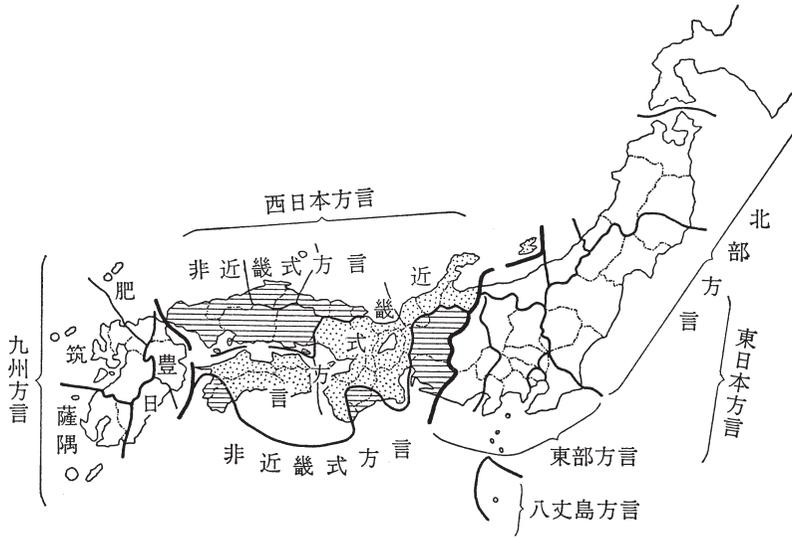
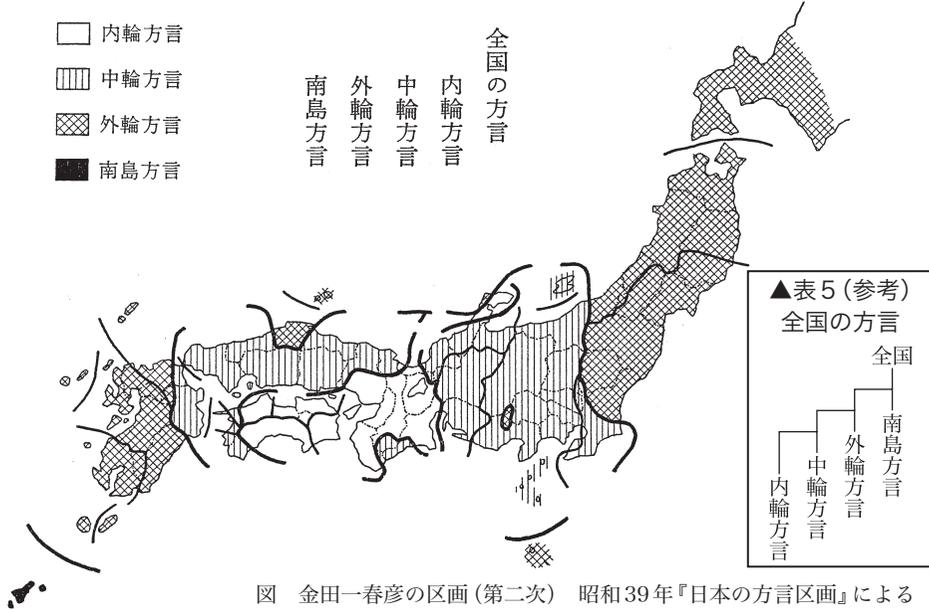


図 金田一春彦の区画(第一次) 昭和30年『世界言語概説』(下)による

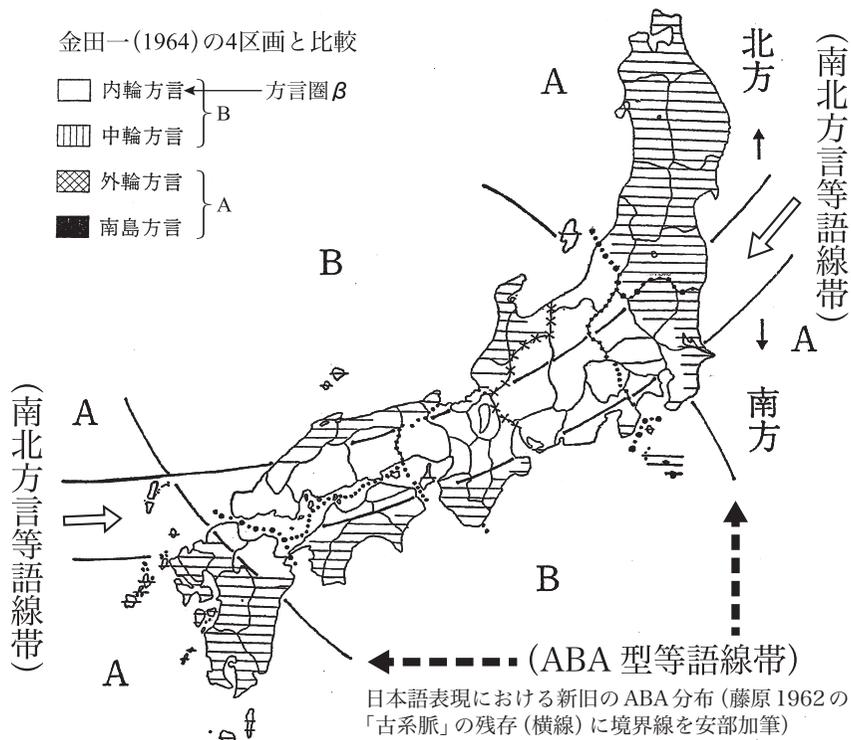
▲表4 金田一春彦の方言区画案 第一次案(1955)

九州方言(省略)	西日本方言		東日本方言				
	非近畿式方言	近畿式方言	八丈島方言	北部方言	東部方言		
	四国西南部方言 雲伯方言 中国方言 十津川・熊野方言	岐阜・愛知方言 四国方言 北陸方言 近畿方言		北海道方言 北越方言 北奥方言 南奥方言	東埼玉・房総方言	越後中南部方言	静岡・長野・山梨方言 西関東方言 東京横浜方言

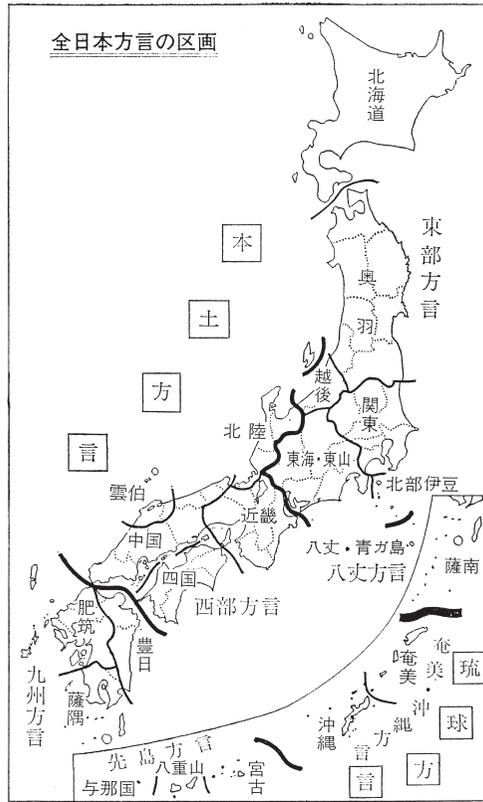
◆図5 金田一春彦の方言区画案 第2次案 (1964)



◆図7 藤原与一の方言の「古系脈」(1964)



◆図6 平山輝男の方言区画案(1968)



▲表6 平山輝男の区画系統表

日本語	
琉球方言	本土方言
先島方言 与那国方言	八丈方言 八丈島方言、小島方言、青島方言
奄美・沖繩方言 奄美方言 沖繩方言	東部方言 北海道方言、奥羽方言 関東方言、越後方言 東海・東山方言、北部伊豆諸島方言
九州方言 肥前・肥後・筑前・筑後方言 薩摩・大隅・諸県方言	西部方言 北陸方言、近畿方言 四国方言 中国方言、雲伯方言
宮古方言 八重山方言	豊前・豊後・日向方言 肥前・肥後・筑前・筑後方言

◆図8 音韻による方言区画 (金田一春彦 1953)

- ▨ 裏日本式方言
- ▧ ○と⊙の間
- 表日本式方言
- ⊞ ○と⊕の間
- ▩ 薩隅式方言

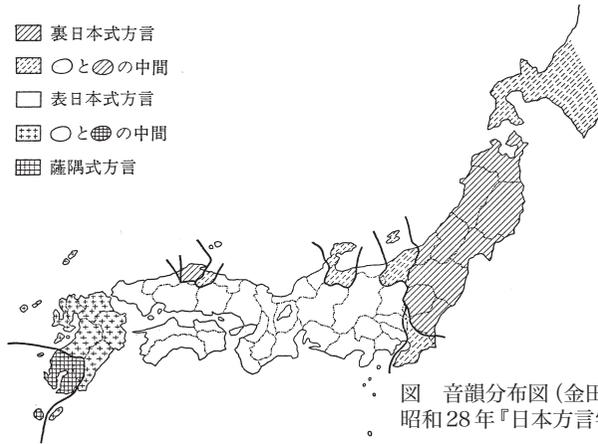
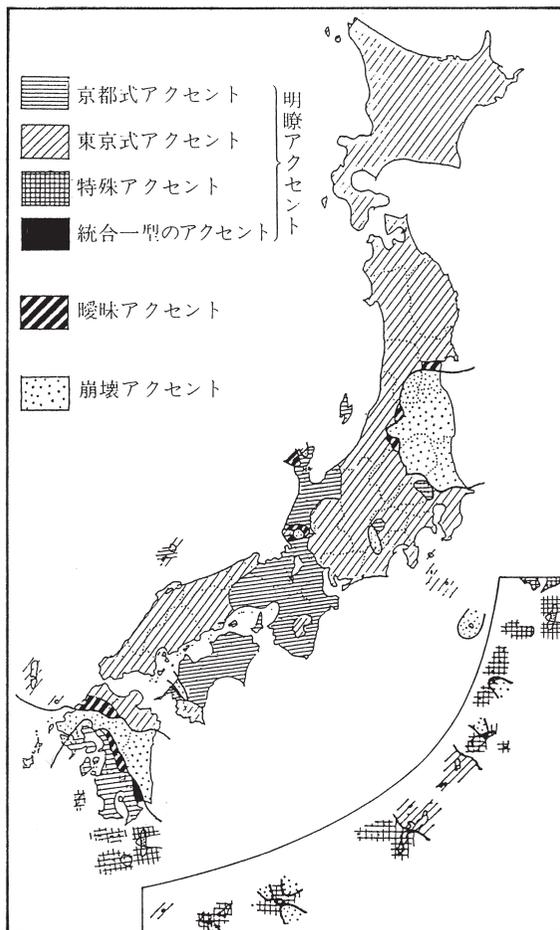


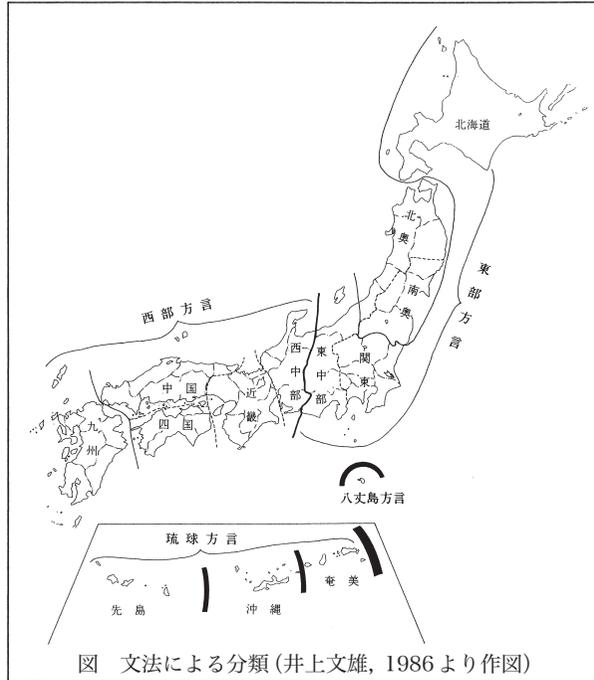
図 音韻分布図(金田一春彦)
昭和28年『日本方言学』による

◆図9 アクセントによる方言区画 (平山輝男 1968)

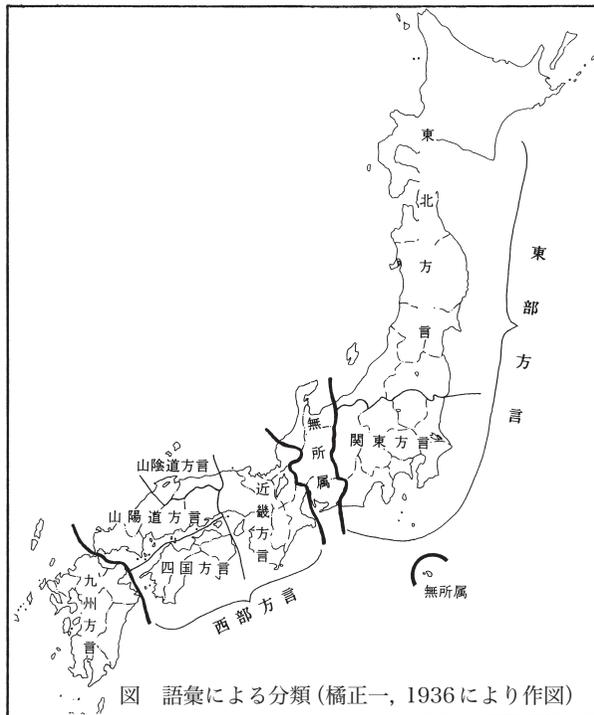
- ▨ 京都式アクセント
 - ▧ 東京式アクセント
 - ▩ 特殊アクセント
 - 統一型のアクセント
 - ▨ 曖昧アクセント
 - ⊞ 崩壊アクセント
- 明瞭アクセント



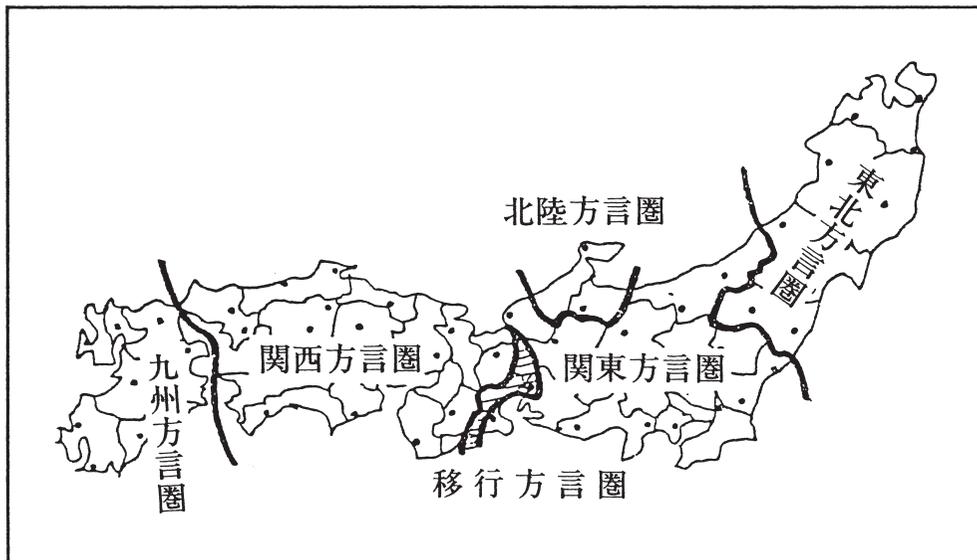
◆図10 文法による方言区画 (井上史雄 1986)



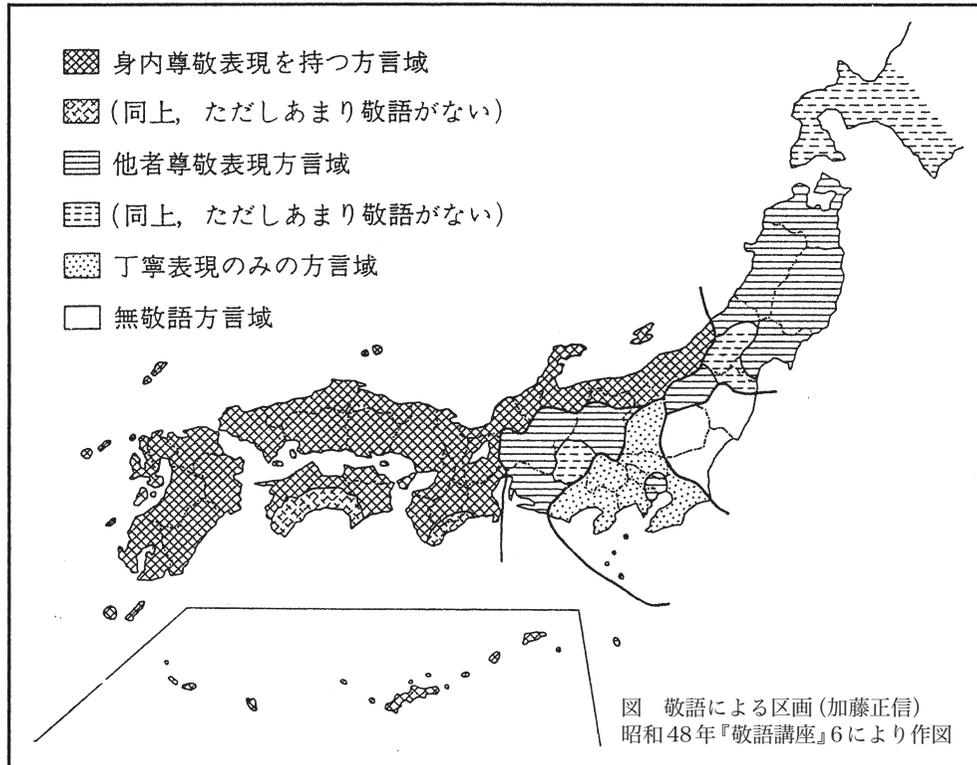
◆図11 語彙による方言区画① (橘正一 1936)



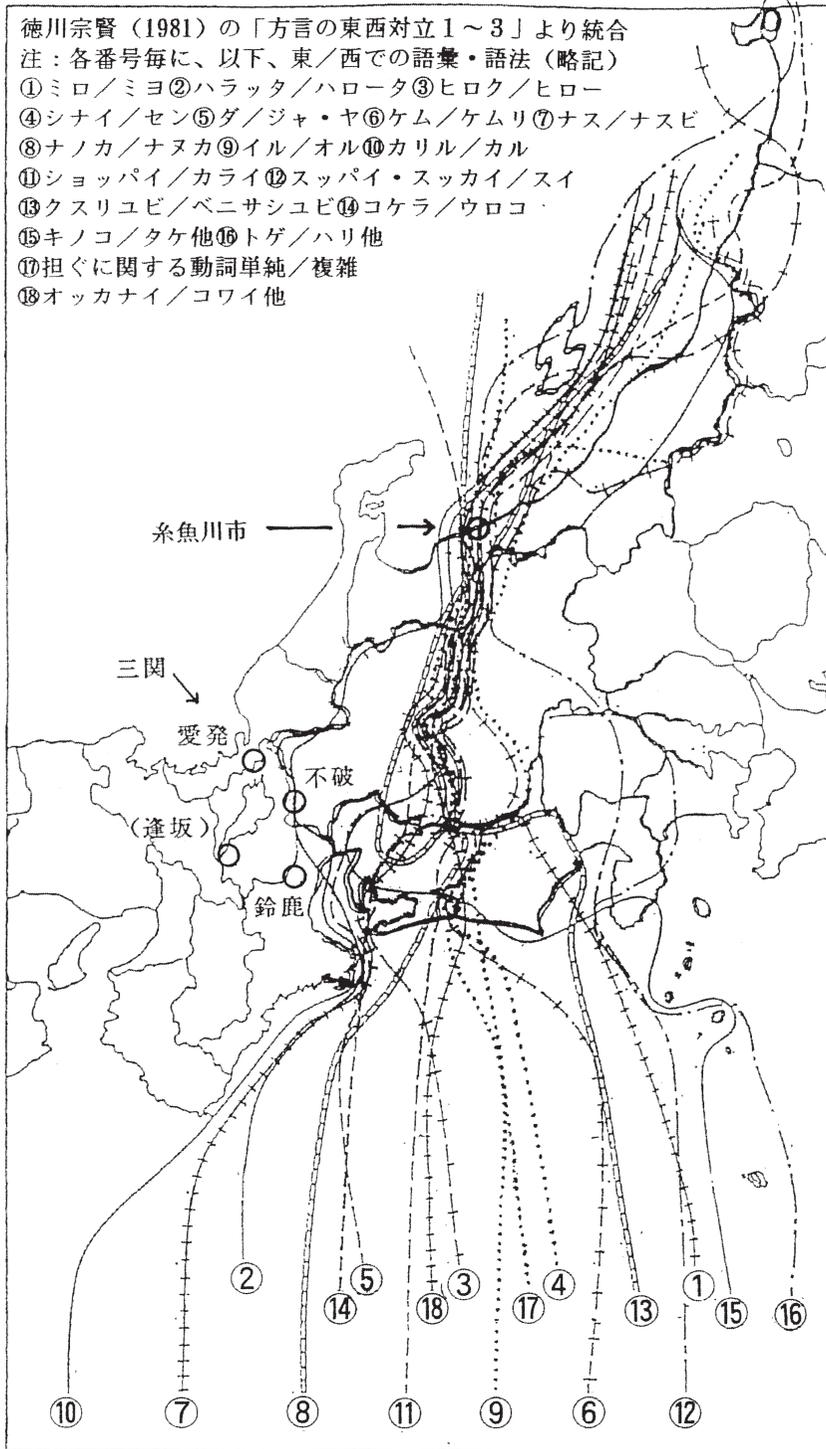
◆図12 語彙による方言区画② (五條啓三1985)



◆図13 敬語による方言区画 (加藤正信1973)



◆図I 等語線帯I 東西方言境界線



図ア 打製石斧大量使用遺跡(●)の群集貯蔵穴のある遺跡(○)の分布(縄文中期中~後葉) 今村啓爾 1999



図イ 「柏崎-銚子線」 前川文夫 1977



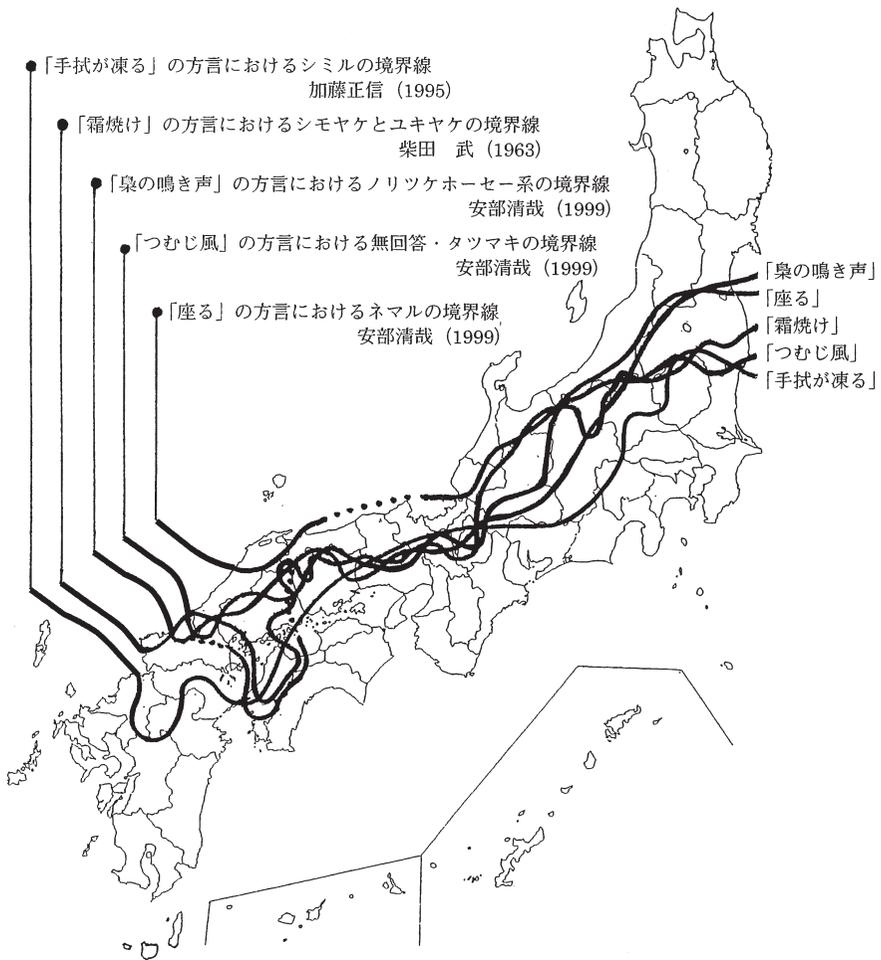
図ウ 湖沼名の語尾「~池」「~沼」



図エ 河川名の語尾「~谷」 原図：鏡味完二 1958 [鈴木日出夫 1978 より]



◆図Ⅲ 等語線帯Ⅲ 日本の「南北方言境界線」



◆図Ⅲ A 等語線帯 「アジアの等語線帯」

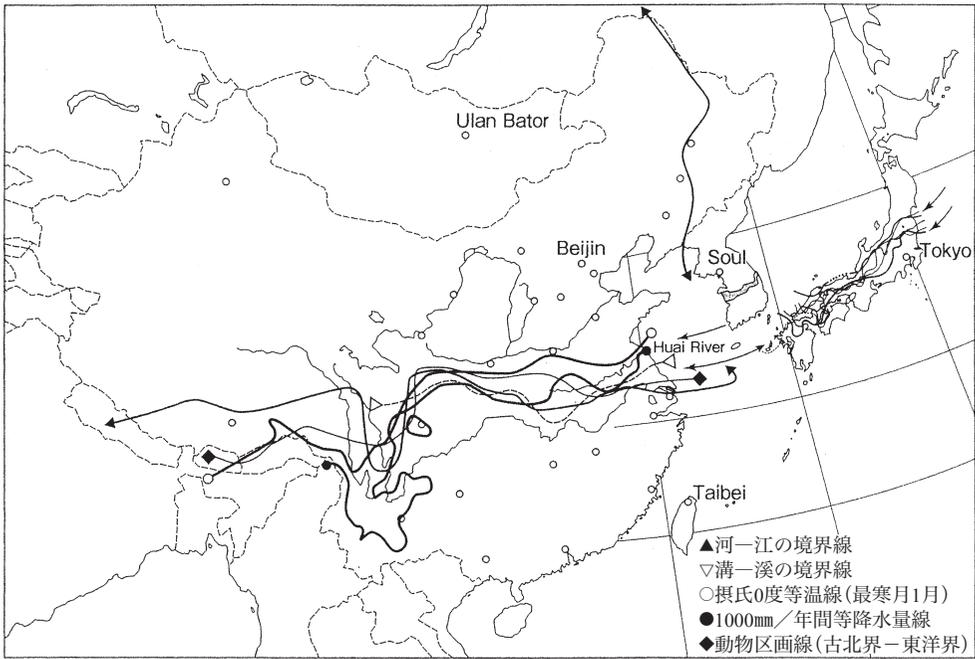


Figure A. Composite borders of languages, culture and climate in Asian region (ABE2013)
アジアにおける言語, 文化, 気候の複合境界線 (安部 2013)

- ▲—▲ North-south dividing line for the use of "he 河" and "jiang 江" in river names of China
- ▽—▽ North-south dividing line for the use of "xi(chi) 溪" and "gou(kou) 溝" in river names of China
- Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
- Isohyetal line at 1000 mm per year
- ◆—◆ Faunal realm (palearctic realm - oriental realm)

◆図III B 等語線帯 「ヨーロッパの等語線帯」

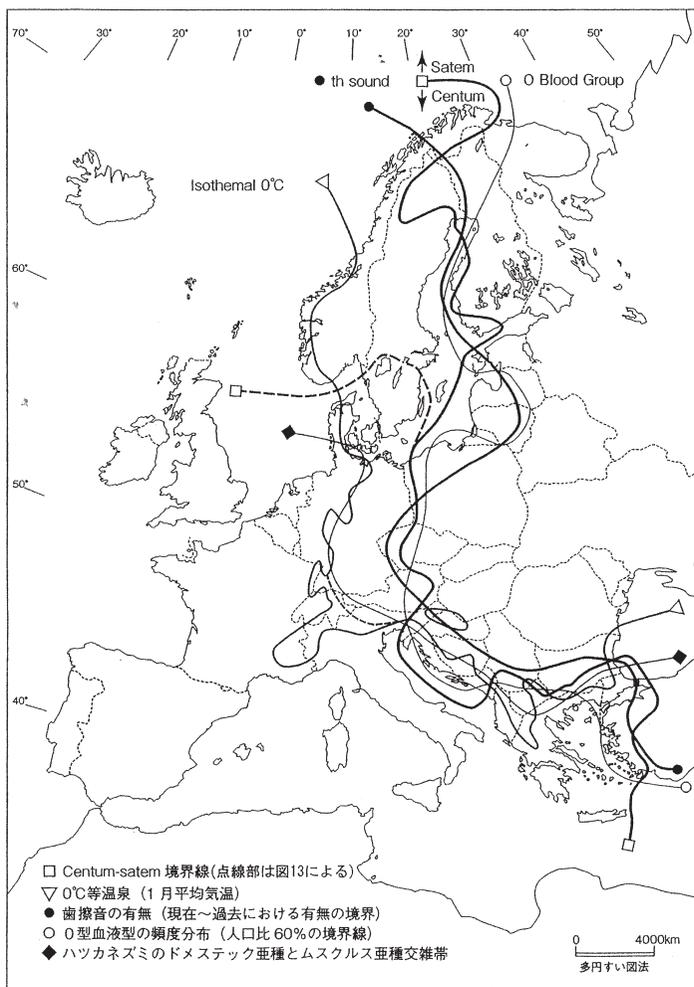


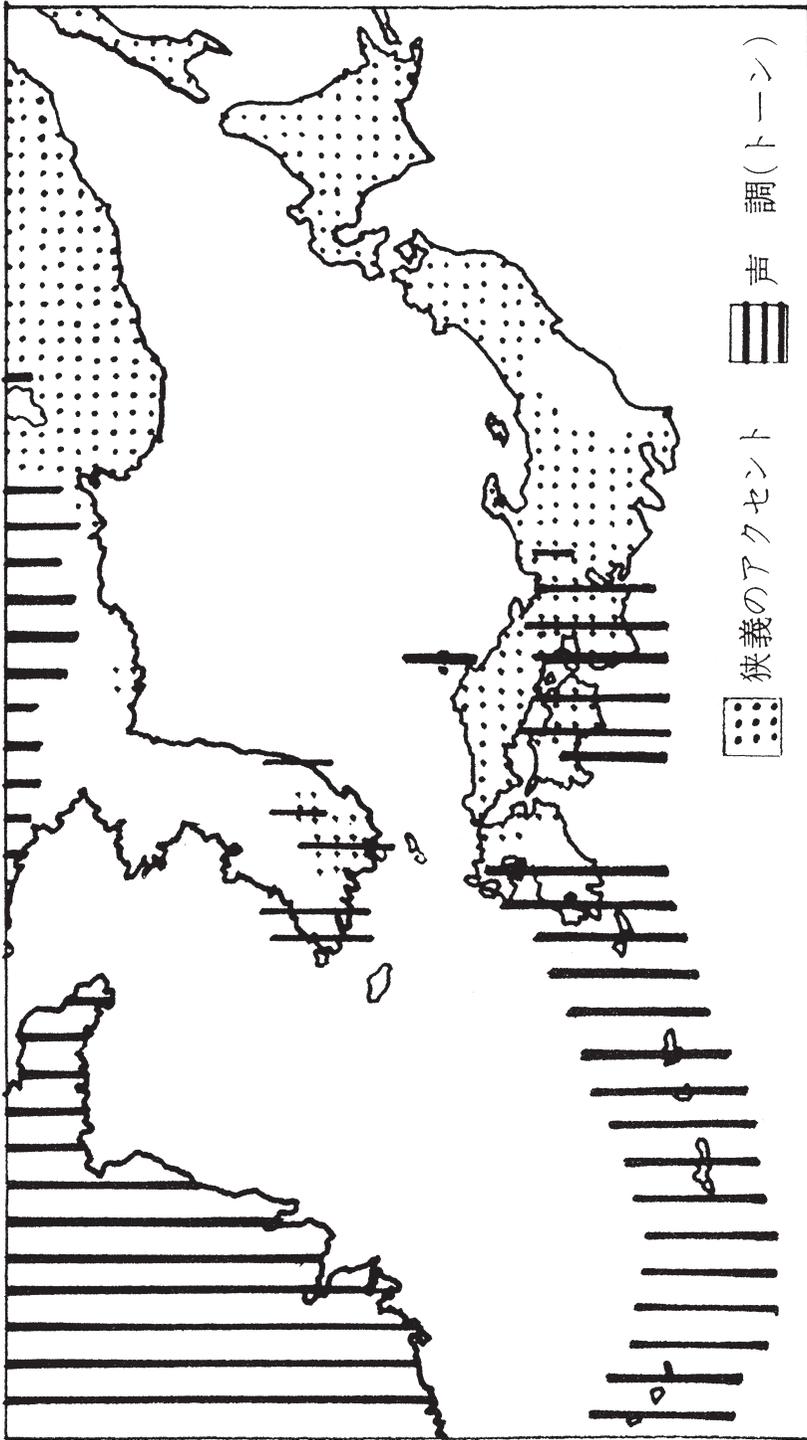
Figure B. Composite borders of languages, culture and climate in Europe (ABE2013)

ヨーロッパにおける言語、文化、気候の複合境界線 (安部 2013)

- Centum-Satem border (dotted line is the border with a different interpretation)
- ▽—▽ Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
- Presence of sibilance (the boundary lines of the presence current and past)
- Distribution boundaries of blood type O in 60% of population
- ◆—◆ Hybridization zone of *Mus musculus domesticus* and *Mus musculus musculus*

◆図14 方言圏α(アクセント)

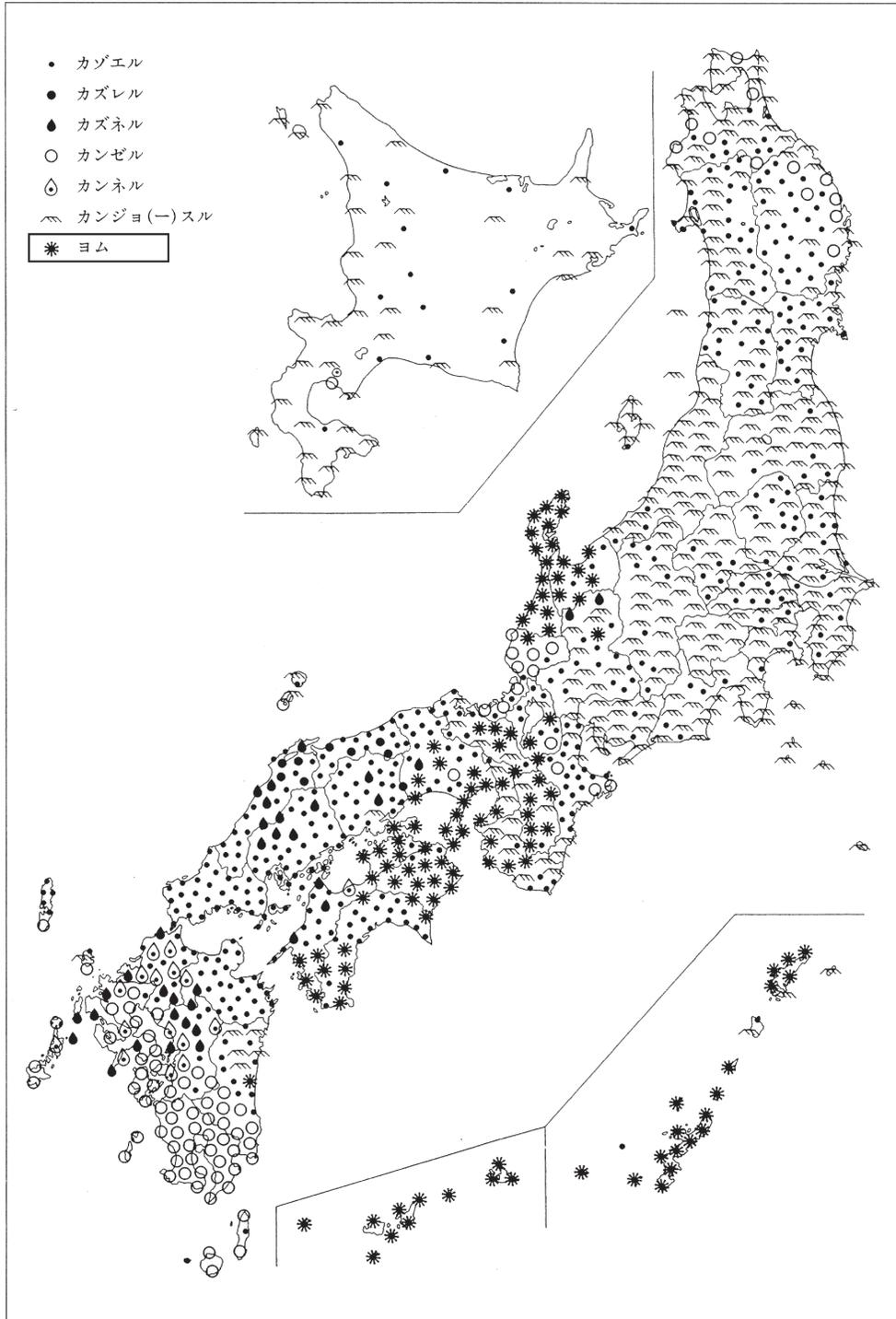
早田輝洋(1987)



◆図15 方言圏α(語彙)

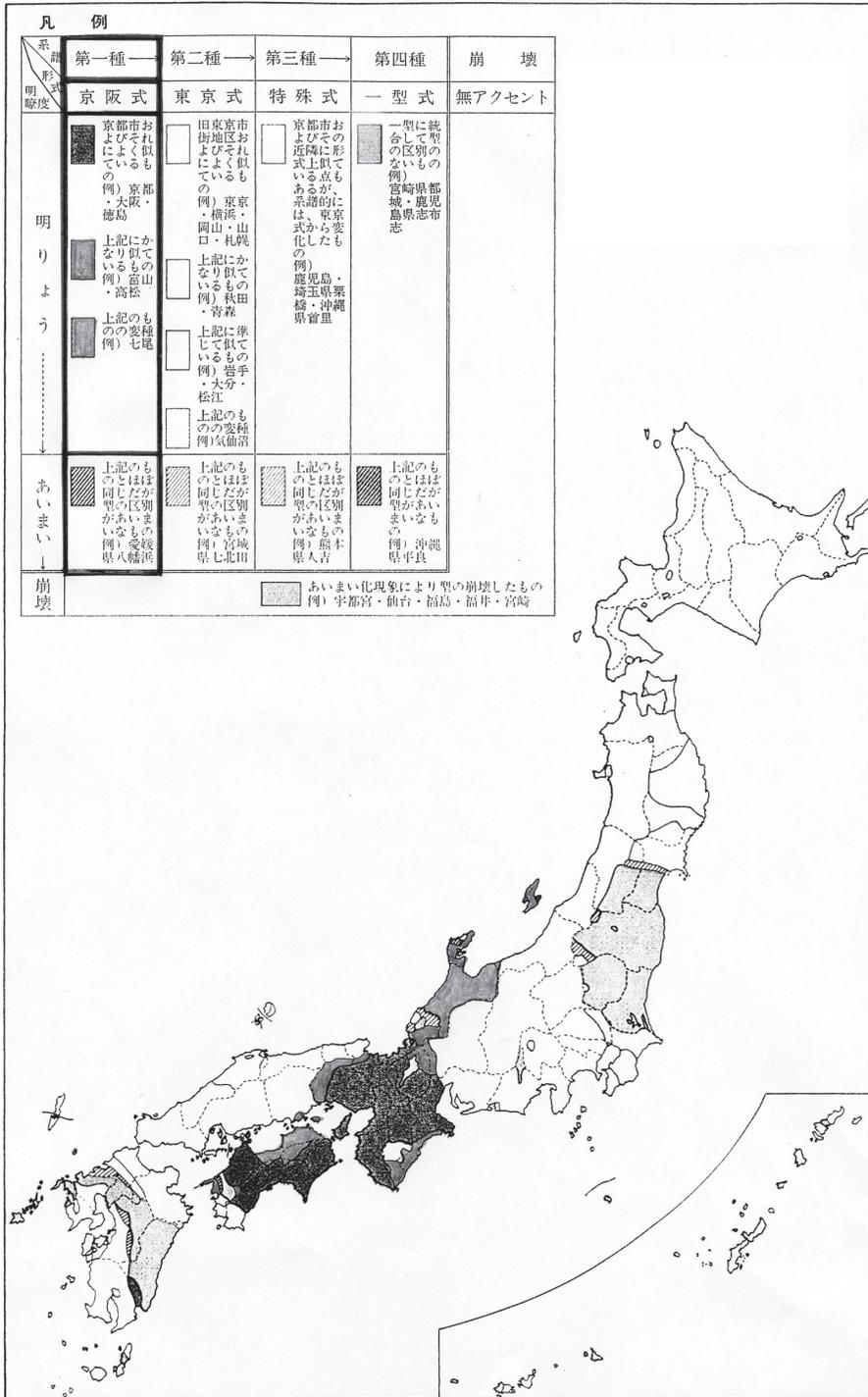
かぞえる(数)の言語地図

佐藤亮一(2002)

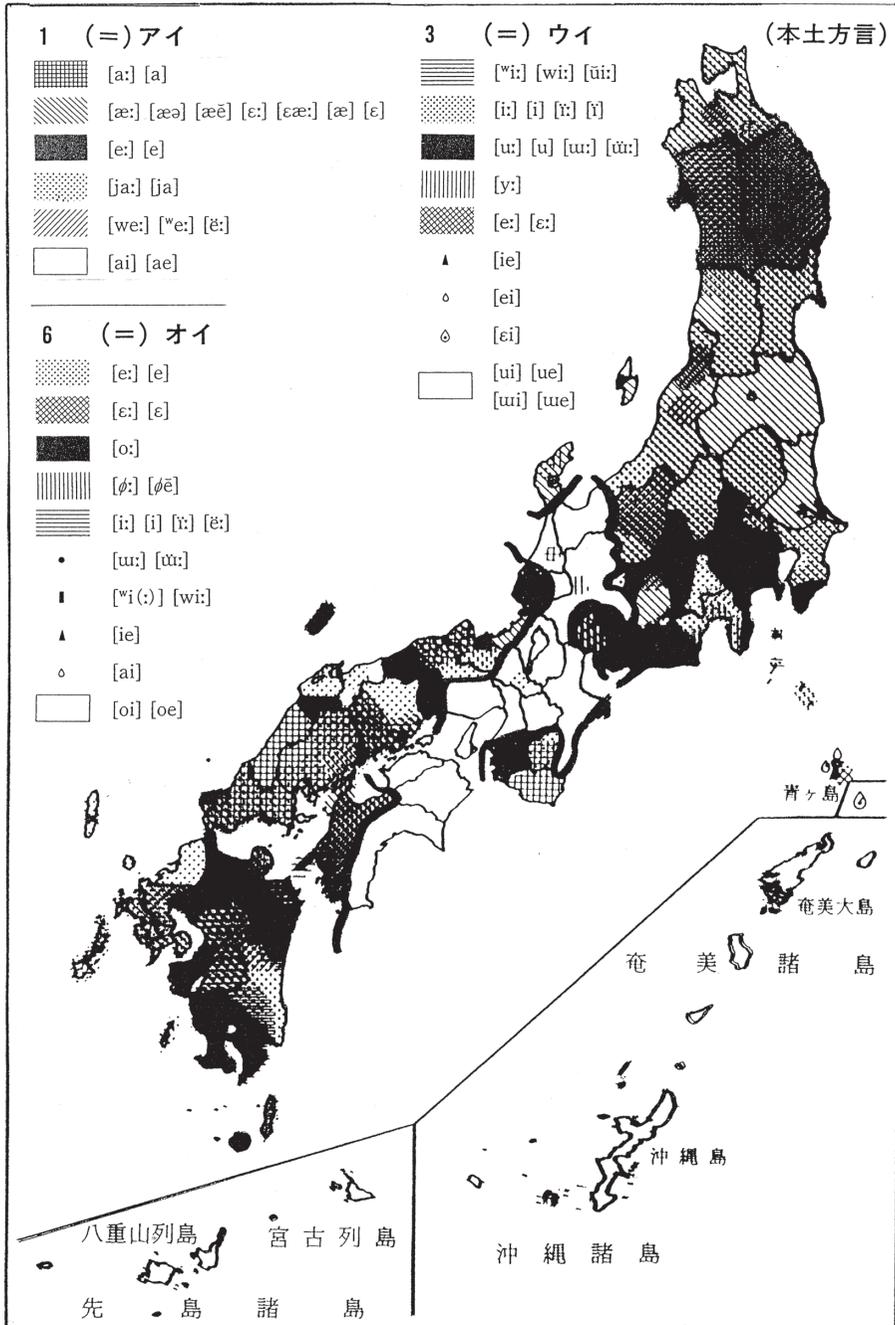


◆図16 方言圏β 全日本アクセント分布図

NHK 編 (1985)



◆図17 方言圏β(音韻)



音韻図 連母音「アイ」「ウイ」「オイ」の重ね合せ図に現れる内輪方言分布 (白く抜ける部分、『音韻総覧』の3図の重ね合せ) (安部清哉 2014)

【参考文献】

- Haag, Karl, 1891, Die Mundarten des oberen Neckar- und Donaulandes (Reutlingen).
- 安部清哉 (2002) 「方言地理学から見た日本語の成立 —— 第3の言語史モデル理論としての “Stratification Model” ——」『グロータース神父記念論集方言地理学の課題』明治書院
- あべせいや (2004.12) 「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15, 明治書院
- 安部清哉 (2006.3) 「アジアと日本列島における言語・文化境界線 “気候線” (摂氏0度線) —— 言語地理学と文化地理学から ——」『学習院大学文学部研究年報』52
- 安部清哉 (2007.3a) 『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究 (平成15-17年度科研費 (基盤研究 (C)) 成果報告書)』、私家版
- 安部清哉 (2008.3) 「アジアの中の日本語」『方言の形成 (シリーズ方言学1)』岩波書店
- 安部清哉 (2012.3) 「東アジア言語 (日本語・中国語・朝鮮語) の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』 (口腔鼻腔流出量比率変化) とその要因について」学習院大学人文科学研究所『人文』10
- 安部清哉 (2013.2) 「日本語方言における『南北方言分布』 (語彙音韻文法) の特徴」『玉藻』47
- 安部清哉 (2013.3) 「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二大分派 Centum-Satem の境界線」学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』15
- 安部清哉 (2014.3a) 「日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧」『学習院大学文学部研究年報』60
- 安部清哉 (2014.3b) 「日本語の『南北型方言分布』の地理言語学的解釈」学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』16
- 井上史雄 (1986) 「文法現象による計量的方言区画」『言語研究』89
- 井上史雄 (2001) 『計量的方言区画』明治書院
- 井上史雄 (2002) 「方言区画論の再生」『21世紀の方言学』国書刊行会
- 牛山初男 (1953.6) 「語法上より見たる東西方言の境界について」『国語学』6
- 牛山初男 (1969) 『東西方言の境界』信教印刷
- 榎垣 実 (1964) 「方言区画論小史」『日本の方言区画』東京堂
- 大島正健 (1895) 「地方発音の変化及其配布」『国民之友』272
- 大橋勝男 (2008) 『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
- 大橋勝男 (2008) 『太平洋沿岸方言音声の研究 上・下』おうふう
- 奥村三雄 (1958.3) 「方言の区画」『国語国文』23-3
- 加藤正信 (1973) 「全国方言の敬語概観」『敬語講座6 現代の敬語』
- 加藤正信 (1977) 「方言区画論」『岩波講座日本語11』岩波書店
- 加藤正信 (1989) 「現代日本語 方言」『言語学大辞典』「日本語」三省堂
- 加藤正信 (1990) 「方言区画論の歴史」『日本方言研究の歩み 論文編』角川書店
- 金田一春彦 (1955) 『世界言語概説 下』研究社
- 金田一春彦 (1958.3) 「音韻・アクセントによる日本語の方言区画」『人類科学』15
- 金田一春彦 (1962) 「方言と方言学」『方言学概説』武蔵野書院
- 金田一春彦 (1964) 「私の方言区画」『日本の方言区画』東京堂
- 熊谷康雄 (1996) 「方言区画の方法における地理的な次元」『言語学林1995-1996』三省堂
- 熊谷康雄 (2002) 「方言区画論と方言地理学: 計量的方言区画のためのネットワーク法の開発を通して」『方言地理学の課題』明治書院

- 五條啓三(1985)「言語地図を利用した語彙による日本語の方言区画」『国語学』141
- 佐藤亮一(1986)「方言の語彙」『講座方言学1 方言概説』国書刊行会
- 佐藤亮一監修(2002)『方言の地図帳』小学館
- 柴田 武(1959.10)「方言境界の意識」『言語研究』36
- 柴田 武(1963.3)「単語の全国分布」『人類科学』15、新生社
- 柴田 武(1964)「方言区画とは何か」『日本の方言区画』東京堂
- 柴田 武(1964)「方言の源流をたどる」『日本語の歴史4 移りゆく古代語』第四章五、平凡社
- 柴田 武(1977)「ことばの地域差」『岩波講座日本語11』岩波書店
- 柴田武・熊谷康雄(1985.3)「言語的特徴による地域分割のための『ネットワーク法』」『国語学』140
- 橋 正一(1936)『方言学概論』育英書院
- 都竹通年雄(1949.5)「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語』3-1
- 東条 操(1921)「我国方言区画」『国語教育』(音韻・語法から観察したもの)
- 東条 操(1927)『大日本方言地図・国語の方言区画』育英書院
- 東条 操(1934)「方言」『日本文学大辞典・』新潮社
- 東条 操(1948)『方言と方言学』春陽堂
- 東条 操(1950.10)「方言圏論と方言区画論」『国語学』4
- 東条操編(1953)『日本方言学』吉川弘文館、「序説」に方言区画の論がある。
- 東条 操(1966)『国語の方言区画』東京堂
- 徳川宗賢(1964.3)「“ことば”から見た日本の地域区分」『人類科学』16
- 日本方言研究会(1964)『日本の方言区画』東京堂
- 日本方言研究会(1990)『日本方言研究の歩み 論文編』角川書店
- 日本放送協会(NHK)編(1985)『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会
- 早田輝洋(1987)「アクセント分布にみる日本語の古層」『言語』16-7
- 早田輝洋(1992)「中国大陸における単語声調言語：上海語とチベット語」『九州大学言語学研究室報告』13
- 早田輝洋(1994)「日本語と日本語周辺諸言語の音調システム——特に複合名詞におけるアクセントと音調について——」『音声の研究』23
- 藤原与一(1962)『方言学』三省堂
- 藤原与一(1964)「わたしの方言区画論」『日本の方言区画』東京堂
- 藤原与一(1964)『方言研究法』東京堂
- 平山輝男(1960.3)「国語史と方言区画の論」『東京都立大創立十周年記念論文集人文篇』
- 平山輝男(1968)『日本の方言』講談社現代新書
- 馬瀬良雄(1964)「方言意識と方言区画」『日本の方言区画』東京堂
- 馬瀬良雄(1969.6)「学区と方言」『国語学』77
- 馬瀬良雄(1970)「方言区画論の問題点と私の方言区画」『方言研究の問題点』明治書院
- 頼富本宏・白木利幸(2001)『四国遍路の研究』(日文研究叢書23) 国際日本文化研究センター

【付記】本稿は、次の2013年度科学研究費(安部は研究分担者)による研究成果の一部でもある。

○日本学術振興会2013年度科学研究費補助金(基盤研究(C)・25370503、代表・新居田純野氏、2013～2015年度)

ENGLISH SUMMARY

The classification and division of Japanese dialects

ABE Seiya

The geographical classification of Japanese dialect has been proposed in a variety of dialect theories. Misao Tojo's "Dialectal region theory", which was the first theory in the history of dialect studies, had the strongest impact on subsequent studies. Subsequently, the dialectal boundaries were clarified by the geolinguistic studies. Furthermore, the necessity of the re-examination of geographical classification was identified from a "Dialectal Region" perspective, different from the viewpoints of the region or dialectal boundaries.

In this paper, the validity of geolinguistic regions takes better account of the diachronic view and is advocated by presenting examples in terms of the interpretation of the historical formation of the Japanese dialects, with greater emphasis placed upon the dialectal boundaries and regions compared with the studies of dialectal region theory.

Now, the Tojo's dialectal region theory can be considered as a theory including the diachronic view.

However, its acceptance was divided into synchronic or diachronic perspectives and affected the subsequent studies. At the beginning, most interpretations of his theory were synchronic, and then studies shifted towards diachronic interpretation. In this paper, firstly, Tojo's dialectal region theory and dialectal region proposals by various linguists were compared in order to clarify the issues of the dialect classification theory. In addition, this paper presents a bundle of dialect boundaries, "dialectal boundaries", which were revealed after Tojo's theory, and peculiar dialect distribution areas, "Dialectal regions", in order to verify the important differences from the conventional region boundary.

In the early representative synchronic region theories, it was proposed that the dialect regions were divided into three areas; East Japan, West Japan, and Ryukyu, or four areas with West Japan divided into two with Kyushu. However, they do not explain the positions of the dialect boundaries sufficiently.

Meanwhile, regional theories proposed by Kindaichi and Fujiwara were both diachronic and were excellent in that they could be interpreted with a bundle of dialectal boundaries.

General theoretical reviews of dialectal regions, dialectal boundaries, and dialectal areas identified the differences and inconsistencies of geographical interpretations. The historical interpretation of the dialect distribution need to be re-examined through a diachronic perspective to eliminate the inconsistencies.

Seen from the diversity of these dialects, the formation of Japanese dialect can be inferred as having passed through more complicated processes than previously thought. Finally, this paper introduces how Japanese dialects need to be examined in the perspective of direct influence of Asia-Pacific languages.

Key Words: dialect region, dialect typology, geolinguistic classifications, the triple bundle of isoglosses, Misao Tojo's dialectal region theory